

高等学校「世界史」の「主題を設定し追究する」学習（1）

— 「世界史」主題学習の変遷から —

森 才三

1999年の学習指導要領の改訂によって大きく改変された高等学校「世界史」主題学習を取り上げ、学指導要領における〈位置づけ〉及び主題学習の〈目標〉〈内容〉〈方法〉という視点から、60年版から89年版までの指導要領における「世界史」主題学習の変遷を再整理してその流れについて考察し、99年版における「世界史」主題の今までとは異なる様相について検討を加える。そして、従前系統的な学習を前提とし、その補完と考えられてきた「世界史」主題学習は、学習計画の中に構造的に位置づけられ、それぞれの位置づけに応じた〈内容〉と〈目標〉が設定されるようになったことを確認するとともに、99年版の「世界史」主題学習には、形式主義・行動主義に抗する意図が含意されていることを解明する。

I 問題の所在

高等学校社会科は、1947年(22年)の学習指導要領(試案)(以下、学習指導要領は指導要領、〇〇年版と略記する)によって、「一般社会科」と「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」の四つの選択科目で始まった。社会科の科目としての「世界史」は、1948年の高等学校教科課程改正による社会科の科目の組みかえ(「世界史」「国史」)によって発足することになり、1949年の文部省教科書局長の通達「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」で世に登場した。しかし、その指導要領の完成は、予定された1949年から大幅に遅れ、1952年(27年)に公布される。以来、1956年(31年)の改訂を経て、「世界史」において主題学習が登場するのは、1960年(昭和35年)の改訂からであり、同時に、文化圏学習も打ち出された。こうして出揃った主題学習と文化圏学習は、幾度かの指導要領の改訂を経る中で、「世界史」学習の二つの柱とされるようになった。

ところが、1999年(平成11年)の改訂では、この二つがともに改変されることになった。99年の改訂において、「世界史」は刮目すべき改変が行われたといえるだろう。高等学校「世界史」はまさに新しい時代をむかえたといえることができるが、本研究では、そうした新しい「世界史」の主題学習について、—

(1) 高等学校「世界史」の主題学習が、幾度かの指導要領の改訂によってどう位置づけられてきたかを振り返り、1999年の改訂の意義を明らかにする。

(2) 新しい「世界史」の「主題を追究する」学習の実践試案を開発し、教授書の形式で提示する。

— を課題とし、本稿ではそのうちの(1)の課題に取り組み、次稿以下において(2)の課題にあたりたい。

指導要領における高等学校「世界史」主題学習について論じた先行研究としては、以下の論考が目につく。

- ① 吉田寅「学習指導要領の変遷と世界史教育」(同『世界史教育の研究と実践』教育出版センター、1986)
- ② 松田至弘『『世界史』における主題学習の意義と展開』(同『世界史学習の研究』教育出版センター、1987)
- ③ 有田嘉伸「高等学校世界史における『主題学習』について」(『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』第28号、1997)
- ④ 原田智仁「主題学習再考—世界史学習論の批判と創造(2)—」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第12号、2000)

①論文は、高等学校「世界史」について、78年版までの指導要領の内容とそれに伴う教科書の変遷を整理するとともに、78年版の改訂の要点に検討を加えたものであり、②論文は、78年版の改訂にあたり、そこに打ち出された「世界史」主題学習について検討するとともに、78年版までの主題学習の研究と実践の歩みをまとめ、自らの実践を提示したものである。また、③論文は、89年版までの指導要領における「世界史」主題学習の変遷を解說的に整理したものである。④論文は、形骸化した主題学習の再生をめざし、99年版における主題学習に検討を加えながら、主題学習の原理と方法について理論的に考察したものである。①～③論文はいずれも、その時々の指導要領の改訂に対してなされた研究として、歴史的な意味ある研究であり、④論文は、99年改訂の担当者の論文として、99年版における主題学習を知ろうとするとき、これ以上のものはないと思われる。

こうした先行研究を踏まえながら、本稿では、主題学習が指導要領のどこで位置づけられているかという〈位

置づけ)及び学習の〈目標〉〈内容〉〈方法〉という視点から、60年版から89年版までの指導要領における「世界史」主題学習の変遷を整理し直して、その流れを考察し、99年版における「世界史」主題学習の意味について検討して、その含意を解明する。

II 1960年改訂から1989年改訂まで

本項では、1960年から1989年までの四回にわたる指導要領の改訂において、それぞれの指導要領で「世界史」主題学習がどのようになっているか、主題学習の〈位置づけ〉〈目標〉〈内容〉〈方法〉の視点からみていく。

(1) 1960年(昭和35年)改訂

60年版では、「世界史」は「地理」とともに、標準3単位のA科目と4単位のB科目が設けられた。その「世界史B」の「内容」の冒頭には、次のように書いている。

世界史Bは、世界史Aよりも深めて取り扱うものとするが、その際たとえばシルクロードと東西交渉、イギリスの議会政治の発達、西部開拓と南北戦争、露土戦争と列強の世界政策、ワイマール体制とその崩壊などのような適当な主題を選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる。それによって、歴史的思考力をいっそうつちかうことをあわせて考慮するものとする。

これが、高等学校「世界史」における主題学習の始まりにほかならない。上記によれば、「世界史A」と「世界史B」の違いについて、《「世界史B」＝「世界史A」＋主題学習》ということが説明されている。ここから、《「世界史B」－「世界史A」＝主題学習》というふうになるのである。指導要領には、これ以外何も書かれていない。このように「世界史」主題学習は、固有の目標・内容・方法をもって出発したものではなく、「世界史A」と「世界史B」の違いとして始まったわけである。上記から、「世界史」主題学習の〈目標〉と〈内容〉について、以下のことを読み取ることができるが、〈方法〉に関することは何らふれられていない。

〈目標〉学習を深化させ、歴史的思考力を一層培う。
〈内容〉5つの主題を例示(政治・経済・社会的な観点から総合的に学習させる)。

このように「世界史」主題学習は唐突に世に現れたわけであるが、それはなぜだろうか。当時は、所謂「初期社会科」批判の時代であり、指導要領は系統学習へと転回していた。直ちにそれを実証することはできないが、そうした背景の中で、教師主導の系統学習に対して、生徒主体の学習は主題学習として、という意図があったのではないかと推察される。そのことは、次の70年版で確認できる。いずれにせよ、主題学習としての説明づけは、次の70年版を待たなければならず、60年版をもって「世界史」主題学習の《成立》とは言い難い。60年版は「世

界史」主題学習の《萌芽》といわざるをえないだろう。

(2) 1970年(昭和45年)改訂

70年版では、従前の「世界史A」と「世界史B」が一本化(標準3単位)されたが、「世界史」の主題学習は「内容の取扱い」において詳しく述べられ説明されている。

(なお、「日本史」において主題学習が登場したのも、この70年版である。)

〈目標〉については、「世界史の目標を達成し、生徒の歴史的思考力をいっそう深める」と説明され、「歴史的な流れの学習の中で指導する」という扱いの位置づけが打ち出された。さらに、『学習指導要領解説』(以下『解説』と略記する)は、次のように説明している。

主題学習においては、いわゆる系統的な学習でつちかわれた歴史的な理解を基礎に、指導事項を広げたり、掘り下げたりすることによって、歴史的思考力を深め、…ことに、そのねらいがある。…なお、主題学習と系統的な学習とは、『世界史』の学習は、系統的な学習を中心にし、両者が有機的な関連を保ちながらすすめられるものでなければならない。

つまり、『解説』では、主題学習と系統学習との関連として、歴史的思考力を深めるため、系統的な学習を補完するという主題学習の役割が述べられているわけである。

「世界史の目標を達成し、生徒の歴史的思考力をいっそう深める」という主題学習の目標は、系統的な学習を補完するという主題学習の位置づけを反映したものであることがわかる。

系統的な学習を補完するということになる、〈方法〉としては、生徒主体の問題解決的方法ということになる。それについて、70年版は「研究・討議・発表や資料の収集など、可能なかぎり、生徒の自発的な活動を中心に学習を展開することが望ましい」と述べている。つまり、主題学習の〈方法〉は生徒主体の問題解決的方法ということが確認できる。

また、主題学習の〈内容〉については、60年版における主題の例示にかわって、主題選定の観点の提示という形で〈内容〉が示唆されるようになった。

- a 政治的、経済的、社会的、文化的、国際的な諸点から、多角的・総合的に学習できるもの
- b 地域ごとの比較考察的な学習、あるいは地域相互の関連的な学習ができるもの
- c 世界の歴史上の発展を、時代別・地域別に大きくまとめて学習できるもの

提示された主題選定の観点は次の三つであるが、取り上げるべき主題の数も示され、別所では歴史上の人物を取り上げることも求められている。主題の例示から主題選定の観点の提示への変化は、授業者の創意・工夫の余地を広げるものであるが、主題学習の〈内容〉は、この範囲において決定されることになる。

このように、「世界史」主題学習は、70年版の「内容の取り扱い」において、その〈目標〉〈内容〉〈方法〉の体裁を整え、系統的学習を補完する生徒主体の問題解決的学習として《成立》したと見るができる。これらをまとめると、次のようになる

〈目標〉	系統的な通史学習を補完し、歴史的な思考力を一層深める。
〈内容〉	主題選定の三つの観点に従った内容。
〈方法〉	生徒主体の問題解決的方法（研究・討議・発表や資料の収集など生徒の自発的な活動の積極的導入）

(3) 1978年(昭和53年)改訂

78年版では、「世界史」は標準単位が3から4へと増えたが、「世界史」主題学習は、「内容の取り扱い」において「歴史的な思考力を一層深め、歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて」と述べられており、従前の趣旨が継承された。目新しいことは、主題を設定する際の観点が、従前の三つから次の五つに整備されたことである。

a	地域ごとの比較考察的又は地域相互の関連的な学習のできるもの
b	時代別、地域別又は国別に、ある程度大きくまとめて学習できるもの
c	現代の諸地域の社会と文化について、文化人類学などの成果を活用しながら学習できるもの
d	世界の歴史上の事象と日本の歴史上の事象とを、比較させたり、関連させたりするなどして、世界の歴史における我が国の位置について学習できるもの
e	世界の歴史上の人物について、時代的背景や地域の特質との関連などにおいて学習できるもの

五つの観点の中で注目されるのは観点cの「文化人類学の成果の活用」である。78年版では生活史・社会史的側面が強調され、「世界史」への文化人類学の導入は、「日本史」への民俗学の導入とともに、78年版を特徴づけるものである。78年版における主題学習は、主題設定の観点到「文化人類学の成果の活用」が加えられ、主題設定の観点の面から〈内容〉の《充実》がはかられているといえよう。しかし、〈内容〉の《充実》とは裏腹に、70年版で「生徒主体の自発的活動を中心とした学習」とされた〈方法〉については、78年版ではそれが放棄されたということではないだろうが、ふれられていない。気になるところであるが、78年版の〈目標〉〈内容〉についてまとめると、次のようになる。

〈目標〉	歴史的な思考力を一層深める。
〈内容〉	主題設定の五つの観点に従った内容。

(4) 1989年(平成元年)改訂

1989年の学習指導要領の改訂は、社会科の解体・再編成という問題で、社会科教育を大きく揺るがした。結果

として、高等学校社会科は地歴科と公民科に再編成され、「世界史」は地歴科において「世界史A」（標準2単位）「世界史B」（標準4単位）となり、「世界史」主題学習は「世界史B」で実施されることになった。

〈目標〉について、「世界史B」の「内容の取扱い」では、「歴史的な思考力を培いつつ歴史に対し興味・関心をもたせるため、適切な主題を設けて学習できるようにすること」と述べている。〈目標〉として、「歴史的な思考力」の他に、新しく「歴史に対する興味・関心」が加えられているわけであり、今までとは違った主題学習のあり方を示唆するものとして注目される。しかし、指導要領が述べていることはそれだけで、〈方法〉については78年と同様にふれられていないし、従前は指導要領の「内容の取扱い」で提示されていた主題設定の観点は、『解説』の「指導計画の作成と指導上の配慮事項」で示されるようになった。つまり、〈内容〉を示唆する観点の提示の仕方は、明らかに緩やかになったといえることができる。提示された観点は、次の四つである。

①	比較文化または比較文明の視点を導入して歴史を学習
②	社会史的な観点を導入し学習できるもの
③	同時代史としての世界の歴史を学習できるもの
④	人間の生活や文明を支えた技術についてまとまった学習ができるもの

示された四つの観点は、社会の変化や歴史学界の動向を積極的に取り入れたものであり、主題学習の〈内容〉の充実をはかろうとするものと考えられる。

主題学習の新しい〈目標〉を提起し、主題学習の〈内容〉を示唆する主題設定の新しい観点を提示しながらも、〈方法〉については何もふれず、観点の提示の仕方は後退している。この矛盾は、一体どういうことなのだろうか。「世界史」主題学習の《萌芽》・《成立》の頃の熱心な取り組みの様子は、前掲②の論文にうかがうことができる。以来30年、主題学習に対する現場教師の関心はかなり薄らいできたであろうことは、想像に難くない。〈方法〉について何もふれられず、〈内容〉に影響する主題設定の観点の提示の仕方が後退していることは、主題学習に対する現場の関心の程度と無関係ではないだろう。89年版によって、「世界史」主題学習は地歴科「世界史」へ《継承》されたわけであるが、89年版には主題学習の《閉塞》状況が見え隠れしているといえることができる。89年版の主題学習の〈目標〉〈内容〉をまとめると、次のようになる。

〈目標〉	歴史的思考力を培い、歴史に対する興味・関心をもたせる。
〈内容〉	主題設定の四つの観点に従った内容。（『解説』）

(2) 「世界史B」の主題学習

「世界史B」の主題学習についても、「世界史A」と同様に、実施する項目(単元)が指定されている。「内容」の大項目(1)と大項目(5)の中項目エ～カがそれぞれであり、世界史学習の最初と最後の部分にあたる。

大項目(1)の主題学習は、文字通り「世界史の扉」として学習の導入となるものである。「内容」では、大項目(1)の〈目標〉〈内容〉を、次のように説明している。

身近なものや日常生活にかかわる主題、我が国の歴史にかかわる主題など、適切な主題を設定し追究する学習を通して、歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める。

主題学習の〈目標〉として、60年版以来「歴史的な思考力」がいわれ、89年版ではそれとともに「歴史への興味・関心」が示されていたが、ここでは「歴史への関心と世界史学習への意欲」が〈目標〉とされている。そして、この〈目標〉に呼応して「内容」の大項目(1)のア～ウでは、それぞれ「気付かせる」ことが求められている。大項目(1)の主題学習は、世界史学習の導入として位置づけられ、学習への動機づけが意図されていることがわかる。さらに、その〈内容〉として例示された「身近なものや日常生活にかかわる主題、我が国の歴史にかかわる主題」の具体的内容として次の3つがあげられ、それぞれ取り上げる事例が例示され、「追究させる」事柄と「気付かせる」事柄がセットで示されている。

- ア 世界史における時間と空間
(事例)…時計、暦、世界地図、都市図など
(追)…変遷や意義
(気)…時間意識や空間意識の時代や地域による違い
- イ 日常生活に見る世界史
(事例)…衣食住、家族、余暇、スポーツなど
(追)…変遷
(気)…日常生活からも世界史がとらえられること
- ウ 世界史と日本史とのつながり
(事例)…接触・交流にかかわる人、物、技術、文化など
(追)…接触・交流の具体的な様相
(気)…日本列島の歴史と世界史との密接なつながり

大項目(5)の中項目エ～カに関する主題学習は、世界史学習の最終部にあたるもので、「世界史A」の場合と同様である。大項目(5)の中項目エ～カに関する主題学習は、「内容の取扱い」において、「例示された課題などを参考に適切な主題を設定し、生徒の主体的な追究を通して認識を深めさせる」と述べられている。そして、これに呼応して、大項目(5)の「内容」においても、他の中項目ア～ウが「～を理解させ、～を考察させる」となっているのに対し、主題学習が求められている中項目エ～カは「～を歴史的観点から追究させ、～を考察(展望)させる」となっている。中項目エ～カの具体的な内容と「追究さ

せ、考察(展望)させる」べく例示された事柄や課題は、それぞれ次の通りである。

- エ 国際対立と国際協調
(追)…核兵器問題、人権・民族問題、第二次世界大戦後の主要な国際紛争など
(考)…国際協調の意義と課題
- オ 科学技術の発達と現代文明
(追)…情報化、先端技術の発達、環境問題など
(考)…科学技術と現代文明
- カ これからの世界と日本
(追)…国際政治、世界経済、現代文明などにおいて人類の当面する課題
(展)…これからの世界と日本

なお〈方法〉については、指導要領では、大項目5の中項目エ～カについて「生徒の主体的な追究を通して」と述べ、大項目(1)については何もふれていない。しかし、『解説』では、いずれの場合についても、「生徒の主体的な追究」を促すため、「作業的・体験的な学習を導入するなど」の学習活動の工夫が求められている。

以上、99年版における「世界史A」と「世界史B(導入部)」「世界史B(終結部)」について、主題学習の〈位置づけ〉〈目標〉〈内容〉〈方法〉をまとめると、次頁の表のようになる。

IV 99年版の意味

99年版を一瞥してまず気づくことは、「主題学習」という言葉が一切見当たらないことである。99年版では、それを「主題を設定し、追究する」と言い表している。こうした「主題を設定し、追究する」という表記は、単に表記の変更に止まるものでなく、以下に述べるような、主題学習の新しいあり方を暗に示していると思われる。

次に目につくことは、その「主題を設定し、追究する」学習を実施する項目(単元)が指定され、指導要領の「内容」で述べられていることである。指導要領における主題学習の位置づけは、60年版を除いて、従前から「内容の取り扱い」であり、「主題を設定し、追究する」学習に対する授業者の任意性は、99年版では狭められているということができよう。しかし、指定されている項目(単元)は、「世界史A」では学習計画の最終部、「世界史B」では導入部と最終部であり、それは「主題を設定し、追究する」学習を学習計画の全体の中で構造的に位置づけるためであることがわかる。

構造的に位置づけられたそれぞれの項目(単元)では、導入部では「歴史に対する関心と世界史学習への意欲」、終結部では「歴史認識を深める」というふうな、学習計画の全体の中での位置に応じて、「主題を設定し、追究す

	世界史A	世界史B (導入部)	世界史B (最終部)
位置づけ	学習指導要領の「内容」	学習指導要領の「内容」	学習指導要領の「内容」
目 標	歴史認識を深める	歴史への関心を高める 世界史学習への意欲を高める	歴史認識を深める
内 容	主題を設定し「追究させ、気付かせる」あるいは「追究させ、考察させる」事柄や課題をセットで提示		
方 法	生徒の主体的な追究 (情報・資料の収集と活用, 調査・ 見学の実施, まとめ・報告・討論な ど)	— (作業的・体験的な学習の導入)	生徒の主体的な追究 (作業的・体験的な学習の導入)

る」学習の〈目標〉が設定されている。また、〈内容〉については、従前は主題設定の観点を提示していたのに対し、99年版では「追究させ、気付かせる」「追究させ、考察させる」事柄や課題をセットで示し、〈内容〉を示唆している。こうした〈内容〉の詳しい指示は、「主題を設定し、追究する」学習が、授業者の授業改善の創意や工夫の任意性を狭めているように見える。しかし、それは「内容」に構造的に位置づけられた以上当然であり、授業者が「主題を設定し、追究する」学習に取り組むためのお膳立てを整えたとみるべきである。

さらに、「世界史」の学習計画の全体の中に構造的に位置づけられたということは、99年版における「主題を設定し、追究する」学習が、従前の指導要領において考えられてきたような、単なる系統的学習を補完する学習ではないということを意味している。ということは、主題学習の〈方法〉も、系統的学習を補完する問題解決学習的な〈方法〉ではないということであろう。しかし、99年版は、〈方法〉について、「生徒の主体的な追究を通して」と述べており、従前と変わらない。これはどういうことだろうか。「生徒の主体的な追究」の重視は、教育課程審議会答申(1998年7月)に打ち出された「児童生徒の主体的な学習を一層重視する」という改善の基本方針に沿うものであり、「自ら学び自ら考える力の育成」を念頭に置いたものであると考えられる。一方、前掲④論文は、「主題学習は生徒主体の学習を旨とするが、それを促すには全てを生徒に任せるのではなく教師の適切な指導が不可欠」と述べ、無限定・無制約な「生徒の主体性の重視」を戒めて、論文を締め括っている。99年版の「生徒の主体的追究」は、従前の問題解決学習的な〈方法〉とは少し意味が異なっていることがわかっていよう。つまり、99年版の「自ら学び自ら考える力の育成」の捉え方は、89年改訂で「新学力観」が提唱されて以来人口に膾炙されてきたような理解とは別所のものである。

V おわりに

「世界史」主題学習は、99年版によって新しい時代に入ることになった。こうした背景には、教育課程審議会

答申の「主題学習による内容の工夫」があることは明らかであり、「自ら学び自ら考える力の育成を重視し、主題学習の充実を図った」と『解説』で述べている如くである。しかし、99年版の「世界史」主題学習は、「自ら学び自ら考える力の育成」を、形式主義的能力観や活動主義的教育観(森分孝治「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義的偏向の克服のために—」全国社会科教育学会『社会科研究』第47号,1997を参照されたい)から捉えてはいない。むしろ、99年版「世界史」主題学習には、「世界史が、社会認識を形成する内容教科の一科目として、形式主義・活動主義に陥らないように」という苦心の跡をうかがうことができる。それが、99年版の「世界史」の「主題を設定し、追究する」学習が含意しているものである。